

---

# 天のツカイ魔

駿河清月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天のツカイ魔

### 【Nコード】

N0287C

### 【作者名】

駿河清月

### 【あらすじ】

世界の存在を掛けて、選ばれた六人の子供たちとその周りの人々が様々な出来事を展開していくストーリーです。

## プロローグ（前書き）

戦ったりするので、多少（ごく、まれに）グロテスクになるかもしれませんが。

## プロローグ

世界は誰かが見ている夢である。

その言葉は真実なのか、嘘なのか、誰にも分からない。  
でも、この世界は確実に今、ここに、存在している。  
私たちは確実に今、ここに、息づいている。  
それぞれの視点で、世界は今も、展開されている。

すぎむらハヤテ  
杉村疾風は、飛空艇の中で淡い夢を見ていた。  
やがみイヴ  
夜神衣舞は、施設のベッドに寝かされていた。  
むとつ  
武藤ヒカリは、程度の低すぎる授業にヒマを持て余していた。  
むらこしシノブ  
村越忍は、冷やかな目で黒板を見つめていた。  
あいだサチ  
合田幸は、静かに近くの席の生徒と談笑していた。  
さおこめユリ  
早乙女優利は、教科書をひたすら読み続けていた。

世界はここから始まった。

『・・・へ到着致しました。御降りの際には、お荷物の確認等を・・』

ハヤテは、ゆっくりと目を開けた。どうやら目的地へ到着したようだ。軽く瞬きをして眠気を覚ますと、荷物を抱えて出口へと向かった。降りる際に、新たな生活の始まりを思いつつ、ゆっくり、一歩を踏み出した。

何のために、ここに来たのか。それは、自分でもよく分からなかった。しかし、来なければ法律に違反することになる。だから来たのだろうか。

なぜ、法律に違反するのか。それは以前ハヤテ宛てに届いた手紙で分かることだった。

ハヤテは近くに配置されていたベンチに腰掛けると、ズボンのポケットからくしゃくしゃになった封筒を取り出した。何回も読み返した内容に、再度目を通す。

（以下、その内容）

『杉村疾風殿』

この度、あなたが“世界天使殲滅機関 戦闘科 直接部隊”に附属されましたことを、ここに改めてお伝え致します。先日直接お話をさせていただいたように、あなたは本部に来ていただき、任務を遂行していただきます。

再度確認させていただきますが、これは世界に直結する国の仕事です。あなたにこれを放棄する権限はありません。ご理解ください。

日時は同封させていただいたチケットに記載されていますのでご確認ください。尚、到着時にはその場へ迎えに行かせていただくので、

その場にて待機しててください。

任務については本部にて、詳しくお伝えさせていただきます。

無事に、お会いできることを願っております。

世界天使殲滅機関

戦闘科長 入谷 印

読み終えた手紙を封筒にしまい再びポケットに戻すと、軽いため息をついた。自分が具体的に何をするかも分からない。ただ“義務”として来ただけだ。自分に課せられた課題に不安を持ちつつ、ケータイの音楽機能を起動させ、イアホンに耳をあてた。ハヤテは基本的に、要領の良い人間である。多少の不安は持ちつつも、だいたいは受け止めることができる。そのうちに、今回も、なんとかなるだろう、と感じつつあった。

そうして音楽を聴きつつ目を瞑っているうち、今朝の映像が脳裏によみがえってきた。

名残惜しそうに手を振る友人、何かを叫ぶ幼馴染み。

（あいつ、あの時なんて言ってたのかな・・・）

考えに、浸り始めたころだった。

「杉村、疾風君ね？」

イアホンをとりつつ顔をあげると、目の前に一人の女性が立っていた。歳は20代後半ほどの、美人さんである。

「・・・はい。お久しぶりです、・・・入谷さん？」

「覚えてくれたのね、嬉しいわ！」

入谷はにっこりと微笑んだ。

「もう一人の・・・橘さんは、いないんですね」

「ん。迎えには2人もいらないもの。・・・じゃあ早速だけど、本部に行きましょうか」

「・・・はい」

2人が飛空艇乗り場から出ると、入谷はタクシーをひろい、本部へ向かわせた。

窓に映る見知らぬ景色を、ハヤテはじっと見つめていた。

## プロローグ（後書き）

これから物語が展開していきます。次回も読んでいただけたら光栄です。



## 第一話：創られた神（前書き）

現在の社会の現状について、です。

## 第一話：創られた神

「なんで、俺、選ばれたんですか？」

ハヤテは問いかけた。

流れ行く景色を見送りながら顔を見ず入谷にそう言った、車内のことだった。

本部に向かうまでに、それなりの距離があるようだ。

タクシーを拾って三時間、未だ、それらしきものは見えない。

「俺は普通の人間です。特別な何かを持つてゐるわけでもないんです」

ハヤテはチラリと窓ガラスに映った入谷の顔を見ようとしたが、自分が邪魔で見えない。

入谷はわずかに微笑むと、

「違うわ。あなたは確実に、特別な力を持っている。世界中の誰よりもね」

そのことは、確信していた。十五年前のその日から、とうに知っていたことだった。

ハヤテは誰よりも特別なものを宿している。他の選ばれた五人よりも、さらに。

だがしかし、もちろんそんなものの存在をハヤテ自身を知るはずもなかった。これまで生きてきて、特別奇怪な現象に巻き込まれたりもしなければ、特別奇怪な生物が現れもしなかったのだ。さらに言うと、「天使」に狙われたこともなかった。

だから、まさか自分が神とは思わなかった。

世界は、存続の危機に晒さらされていた。

十五年前のある出来事をきっかけに、「天使」という未確認生命体が活発に人間たちに加害するようになったのだった。

当時、ある研究者によって“神の御魂”<sup>みたま</sup>の存在が証明された。そして同時に、人間は“神の御魂”<sup>みたま</sup>を手にすることに成功したのだ。それが、罪の始まりだった。人間は、神の実体化を願った。それ故に、ある方法を研究者たちは激しい討論の末導き出すことに成功した。

### ドール憑依計画

その計画は直ちに実行された。“魂無きいれもの”<sup>たましひ</sup>、“ドール”という、人間と姿が酷似した生命体を作り出しその身体に御魂を憑依させたのだ。そして人々は、“世界で最初に出版された書物”である聖書から、最初のドールを「アダム」とした。人間は、神の姿をもとに創造されたものとされている。ただし、人間が完全の姿になるには「アダム」だけでは不可能だった。だから人々は、二番目の人間「イヴ」を創ることを願った。人間は、神になりたかったのだ。

創造責任者は言った。

「この子は神だが、これから人間になる。だから人間の名前が必要だ」

彼は若くして優秀な、日本人研究者だった。御魂の存在を証明したのも彼だった。

だから神は日本に生きることとなった。

彼は言った。

「神の名は“杉村疾風”<sup>すぎむら ハヤテ</sup>。この子には日本で、普通に生活してもらいたいと思っている。しかし残念なことに、その生活に私が混ざることはないだろう」

彼の名は杉村雪人<sup>すぎむら ゆきと</sup>。創造されたドールの容姿は彼がベースとなり、よく似ている。まるで親子のようだった。人々は尋ねた。

なぜ、神とともに生活しないのか？

杉村はその整った精悍な顔で、笑顔をつくった。ジョークを言うかのように、悪戯っぽく。

「神は人の子ではないからな。みなさん、“イヴ創造計画”は任せましたよ」

その言葉を最後に彼はこの世を去った。彼の概念をそのままデータ化しインプットさせた機密プログラム「MARIA」を残して。

“神” 杉村疾風はこうして世界に誕生した。そしてそれ以降、人間の起こしたこの罪によって「天使」が人々を襲った。

MARIAの概念をベースに、人々は「天使」に対抗した。神がこの世に誕生して以来、その御魂を狙って襲撃してくるそうだった。人々はこう検討した。

天使とは、人間と同じく神になりたがっている存在である。それ故にそれらは神を狙い、また神の姿を模られた人間の姿をも、手に入れようとしている。

アダム創造後、人々はイヴの創造に成功した。そしてさらに、神の力が杉村疾風だけにあるわけではない、ということを見出した。

神がドールに憑依させられる際に制御しきれない力が体内から溢れ出し、その持ち主をもとめて漂ったようである。持ち主は杉村疾風と同年の四人の子供たちと、次いで創造された夜神イヴとなった。彼女たちは今、収集されて本部にいる。

杉村疾風及び神は、体内に入ったことによって一時的に力を失った。よって「天使」に狙われることなく生活を送ることが可能になった。人々は亡き杉村の言葉を思い出し、本部から杉村疾風をはなしてしばらく普通の生活を送らせることにした。そして杉村疾風は、杉村の遠い親戚である夫婦の元へとあずけられた。

いつかまた覚醒が訪れるその日まで。

## 第一話：創られた神（後書き）

これから、登場人物が増えていきますので、次回もよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0287c/>

---

天のツカイ魔

2010年10月14日12時03分発行